

～ 防災とユニバーサルビーチの発展を前提としたビーチセンター活用案 ～

震災復興から観光資源の維持とさらに進化した情報発信の基地としてのビーチの活用と地域コミュニティの再生構想
(ユニバーサルビーチクラブ円卓勉強会より 2014.5.18)

大洗サンビーチは全国に先駆け1997年より「誰もが安心して安全に楽しめるビーチづくり（バリアフリービーチ）」の活動を開始。ビーチまでのアクセスを改善したり、障がい者や高齢者が波打ち際で楽しめる水陸両用車いすの導入、誰もが楽しめるビーチイベントの実施など先駆的な実践を行い、2007年からは「ユニバーサルビーチ」と銘打ち、より一層快適なビーチづくりを提案している。

津波防災計画ではビーチに築山が設置され、より安心安全なビーチにリニューアルされる予定である。新たに設置されるビーチセンターを中核として、防災意識を高めるとともにユニバーサルビーチの活動を継続発展させ、老若男女だれもが楽しめる理想のアミューズメントビーチを目標としたい。さらに、全国唯一のユニバーサルビーチを「まちの宝」としてまちづくりにも活用していきたい。

大洗サンビーチとは…

年間25～50万人の利用者を数える我国有数のファミリー海水浴場。
海という大きなバリアに抱かれたその空間は、おとなも子どももハンディキャップの有無を問わず自然との共生を『共に楽しむ』ことを目的とした「ユニバーサルビーチ」と称している。

防災・観光および多様な文化交流拠点／「新しい公共」を担う人材育成拠点

【現状と課題】

- ① なくてはならないもの
1000年に一度と言われる震災。防災の意識を常に保つためには「自然を理解」するための仕組みが必要となる。
- ② 「まちの宝」ユニバーサルビーチ
観光立町大洗にとって、復興とさらなる発展にあたっては「ユニバーサルビーチ」の地域ブランド化が肝要である。ユニバーサルのビーチの活動を継続するためにビーチのハード設計にはバリアフリー化は必須であり、さらなる発展を目指すためにビーチセンターの機能は重要。
- ③ 多様な情報発信基地として
サンビーチが全国の浜に及ぼした影響はまさにレジェンドと評価されていると聞く。しかし、海を観光の目玉としている町の子どもたちの「海離れ」が危惧されている。人を核にしたランドデザインはこれからのまちづくりにかかる子どもたちの未来にとっても大切なものである。ユニバーサルビーチを「まちの宝」と認識し、ともに成長することは多様な人々と継続的に関わる機会およびプロセスを共有する機会を提供することが必要である。
- ④ 観光客への責任
観光立町として、通年浜を訪れた利用者へのホスピタリティーが脆弱。
 - A 利便性（トイレ（障がい者用を含む）、給水の健康対策や案内全般）
 - B 娯楽性（自然教育や環境学習を中心としたプログラム）
 - C 安全性（浜のゾーニング、FA対応や有事の周知、誘導）

【解決策としてのビーチセンター】

① ビーチセンターの設置場所

築山の最も海側に常設のビーチセンターを設置し、現パトロールセンターは夏季のみ仮設で設置する。同時に、ビーチセンターの運用には欠くことのできない教育エリアの確保は必須である。

② ビーチセンターの活用方法

ビーチの防災拠点であるとともに、夏季の浜の安心安全を担保する機能に加え365日稼働可能なものとし、町民にとっても観光客にとっても安全で心地よい居場所となるよう設計する。

③ ビーチセンターの機能

- ・防災の及びビーチの安心安全確保の拠点を中心として、365日ビーチの安全確保の権限を持つ職員（海岸の管理運営者としての権限を付与された職員）が常駐することにより、町民はもとより来訪者への安全を担保する。
- ・隣接する駐車場及びグラウンド等の管理運営
- ・非常時の避難誘導の司令塔としての機能や防災訓練等の実施拠点
- ・平時には防災や水辺の安全に関する学習拠点として利用するほか、観光客・町民への情報発信基地として「まちづくり」の拠点とし、大洗の観光振興にも寄与する施設とする。

④ 大洗版「新しい公共」の姿を提示

「ユニバーサルと人」をキーワードに研修や学びを通じて町民や来訪者に啓発活動を積極的に行い、防災教育や文化振興に関わる人づくりの拠点とする。

⑤ ユニバーサル情報発信基地

福祉機器の常設展示や見本市、市街地などを利用した福祉機器の開発協力や企業誘致を行うことで、ユニバーサルな地域づくりに寄与する。

⑥ コミュニティビジネスの可能性

歴史に培われた漁業、農業など地場の産業や特産品などの「まちの宝」に関する情報の集積を図り、人と人をつなぎコミュニティビジネス発信基地とする

⑦ 設計概要

・津波情報の屋外緊急放送装置

海上保安庁、消防、警察、医療機関等関係機関とオンラインで接続する機器を備え、ビーチ利用者に対し防災情報を提供し迅速な避難を誘導。また、コミュニティFMを運営し、インターネット放送や町の防災放送網についても同時に活用することにより緊急避難情報や災害時の避難情報・生活情報をリアルタイムで配信する。

・傷病者・避難者のためのスペース

傷病者や避難者の一時的待機スペースの確保。トイレ（障がい者用、オスメトイレも設置）・更衣室（2室以上）・授乳室・シャワー室・処置室等を配置する。

・防災機材の収納

レスキューに必要な機材（マリッジット、レスキューボード等）の収納と管理スペース。海水浴場開設期間中にはライフセーバーの活動拠点としても活用。

・緊急用飲料及び食料の備蓄倉庫

・情報ラウンジ

情報機器を設置し気候情報や海洋情報を提供するとともに、周辺の観光情報や地場産業の支援などにも活用。ビーチのみならず大洗周辺の情報を蓄積して提供することで、観光客や町民サービスを向上させる。

・展示ギャラリー

東日本大震災を中心に、過去の災害等の情報をパネル展示や映像で提供し、実例から学ぶ防災についての啓発活動を行う。また、防災への在り方を含めた「ユニバーサルビーチ」の取り組みなどを紹介し、「ユニバーサルビーチ」を地域ブランドとして紹介する。

・情報発信ブース

町立図書館のサテライトとして特徴を持つ図書の閲覧スペースを確保し、町内外の来訪者が楽しめる居場所づくりを行う。また、大洗に関する情報を集約することで新たなビジネスモデルを確立する支援を行う。海を感じながら快適に過ごせる使い勝手のよい多機能スペースなども兼備する。

・屋外テラス

観光客や来訪者が気軽に訪れるオープンスペースを解放し、海を楽しみながらくつろぐことのできるエリアとしてドリンクなどを提供する。また、ビーチフラダンスやビーチヨガ、ロミロミ（ハワイアンマッサージ）などのイベントスペースとしても活用する。

・ワークショップルーム（研修ホール・研修室）

防災・減災の学習拠点とするとともに、ユニバーサルビーチを活用したイベント等にも活用する。

⑧ ビーチセンターを中核とした企画内容

- (1) 県内外の小中学生を対象として、防災やユニバーサルについて実際にビーチを利用した体験型学習プログラムを提供し、啓発活動を行う。また、従来より実施してきたジュニア・ライフセービング・プログラムをバージョンアップさせより海に親しむための内容として再構築する。
- (2) 誰にでも安心・安全を提供するビーチや街中での体験型ユニバーサル研修プログラムを開発し、民間企業や官公庁に提供する。
- (3) 遊泳客の安全を確保するためのライフセービング講習会し全国から参加者を募る。講習会期間にはおもてなしの町として、将来支援者となる学生たちに接していく環境をつくる。
- (4) 海洋環境の保全、資源としての持続的開発を進めるための海洋教育の拠点とし、海を知り、海を楽しむ、守り海を利用するための各種プログラムを提供。特に学校教育機関と連携し、小学校を対象とした総合的な学習にも対応できるような企画を策定する。
- (5) 「海離れ」を指摘される地元の子どもや親が海に近づく契機となるような体験イベントや読み聞かせなどを提供し、「海はかけがえのないもの」であることを体感し、海好きになってもらう。子ども会やPTAとの連携を通じて地域の大人が子どもの育成に主体的に参画する機会を増やし、子どもの学習環境を整え、地域の大人が潜在的に持つ多様な遊び・文化・自然・アート・スポーツ・学習体験等のプログラムを展開する。
- (6) 県北ジオパーク推進協議会と連携し、大洗を中心とした山間部や潤沼など広域的なジオツアーを実施。
- (7) 大洗海の大学、大洗町漁業研究会、茨城サーフィンユニオン等と連携し、カヌーやサーフィン、ビーチバレー、オープンウォータースイミングなどビーチスポーツの講習会や大会実施の拠点とする。
- (8) 旅行代理店と連携した地域交流プログラムを開発。観光庁が促進する「ユニバーサルツーリズム」や海辺体験の「ブルーツーリズム」による集客を図る。活動的な障がい者をよりいっそうサポートするとともに、制約のある障がい者も楽しめる企画も用意する。
- (9) 東日本大震災をはじめ過去の災害を振り返る映像をシアター形式で上映し、防災意識を高める。
- (10) 施設には災害時にも対応できる乳児用ミルクや離乳食の調理もできる場所、太陽光発電設備、雨水を中水としてトイレにも利用できるよう貯留タンクの設置、石油燃料に頼らない暖房機器（薪ストーブなど）東日本大震災の教訓を活かす設備を整備する。
- (11) 点字や音声案内などユニバーサルに対応する表示にも留意する
- (12) 災害時に弱者と言われる女性や子ども、高齢者などにも対応できる「やさしい」ビーチセンターとする。

【ビーチセンターの運営】

ビーチセンターは、利用者のニーズとユニバーサルビーチの活動に精通した NPO 等市民セクター（大洗海の大学・大洗 SLSC）が担い、コーディネーターを複数配置し情報発信等も行う。アウトドア活動のみならず屋内外を利用した文化的な活動も積極的に行う。

【期待される効果等】

① 防災意識の高まり

東日本大震災を振り返る情報の提供により災害への備えに対する意識を高めることができる。また、気候や災害情報をリアルタイムで提供することにより、防災意識を高めることができる。

② 体験が意識を変える…現代日本社会の根本を変える体質改善機能

実験ビーチとして自然との共生の姿を顕示し、各種プログラムを通じた防災及びユニバーサルを体感することによって意識改革を促す。

③ お金では買えないもの

上質な遊び、文化・芸術、自然、スポーツ体験は観光の目玉となるものである。同時に、町の子どもたちの人間性を育み、コミュニティの本質的な人間関係を変えていくパワーとなる。ただしこれは商業ベースでは達成できるものではない。

④ 多様な人々の居場所

地域のリソースを開拓し、多様な人々に関わることで、子どもは自分の属する「地域」を実体と体温のある存在として認識し、参画することを学んでいく。家庭・学校ではない第三の居場所となるビーチ体験が社会の原体験として子どもの人格基盤を形成する。

⑤ 社会構造の刷新への期待

活動の広がりによって、企業の参画が奨励、評価され、公共的企業、CSR への関心を持つ企業が地域社会で評価される道筋ができる。関わった企業内にもユニバーサルデザイン（生物多様性）に対する認識が構築され、企業の体質改善が推進される。人間育成観念を刷新しベーシックな力を醸成するものとなる

【評価軸】

- ・サンビーチは先駆的な生物多様性の感動体験ビーチとして唯一無二の存在である。ライフセーバー育成など社会参画を通じた自律性育成の実績やハンディキャップを持った方々の活動など多様な人間関係がサンビーチには存在する。地域全体がユニバーサルデザインの情報発信基地として機能する新たな人育ちのコミュニティの創造を目指す。
- ・自然と対峙したリアルな活動を基盤に自治のコミュニティを形成し、観光やまちづくり施策を協議し、ランチ機能を形成。
- ・まちづくりにユニバーサルデザインを置くという独自の情報を発信する。評価機能、リソース提供、支援・情報交流促進機能としての中核施設を置く。町は活動する物理的空間を確保し提供する。関連する学校・保育園・幼稚園・図書館などは、積極的にビーチセンターコーディネーターを支援し連携する。

ご協力いただいた学識経験者（敬称略）

「なんだかうれしい。」店主、元秋田県立図書館館長 長谷川鈴子
茨城大学准教授 長谷川幸介／茨城大学工学部教授 山田稔
兵庫県立大学准教授 赤澤宏樹／茨城県デザインセンター 中山宇生
大洗海の大学代表理事 関根孝明

◆ユニバーサル・ビーチ・クラブ

会長:足立正俊 学術助言:山田稔 長谷川幸介
事務局:井坂美子

FACEBOOK PAGE

<https://www.facebook.com/u.beach.club>